

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行  
第3回フォーラム検討会議  
議事録

日時：平成24年12月5日（水）15：00～18：30

場所：：東京大学工学部12号館2階会議室

出席者：11名（順不同・敬称略）

木村（東大）、足立（元気ネット）、植木（元気ネット）、円満字（PONPO）、  
大石（PONPO）、神崎（PONPO）、鬼沢（元気ネット）、渋谷（元気ネット）、  
竹中（東大）、丸山（NV研）、諸葛（東大）

配布資料

F3-0. 議事次第

F3-1. 第2回フォーラム検討会議議事録（案）（逐語録を含む）

F3-2. フォーラムに関する議論の整理

F3-3. 調査票案（フォーラム参加希望者用）

F2-5. エネルギーと原子力に関するアンケート（案）（本調査）

F2-6. パワーポイント資料

議題

0. 議事録確認

1. フォーラムの検討

2. 「原子カムラ」について

3. その他

※議論の詳細については、逐語録に記録されている。

## 0. 議事録確認（配布資料 F3-1）

木村氏から、資料 F3-1 に基づき、前回までの検討状況の確認が行なわれた。

## 1. フォーラムの検討（配布資料 F3-2、F3-3、F2-5）

木村氏から、資料 F3-2 に基づき、検討すべき項目が提示された。項目ごとの議論を以下にまとめる。

### 【観察者の目的設定を達成するための条件】

- ・ 「変化」を起こすためには、フォーラムの時間が十分に必要である。（【フォーラムの内容、段取りの決定】で議論）
- ・ 話し合うだけ、観察するだけでは、気付くことはあるが、「変化」は難しいのではないか。「変化」を促す（きっかけ）には、市民と専門家との「協働作業」があるといいのではないか。（例：グループ作業で役割分担をする。役割によっては知識とは関係ないスキルがありうる、ということに気付くことができる。）
- ・ 「意見をまとめてください」というグループ作業を行なうと、グループの「社会的リアリティ」（グループの和を乱したくない）という力が生まれる。まとめようとする行動は、普段のリアリティを抑制する可能性がある。「社会的リアリティ」を共有する場の設定になるかもしれない。

### 【フォーラムの目的設定】

木村氏から、フォーラム参加者の目的と、観察者の目的を同じにしてはどうかという提案がなされた。そのことをどのように参加者に説明するか、その文章の検討が行なわれた。

- ・ 市民とムラびと両方を、同じ文章にしたほうがいい。
- ・ 「フォーラムを通じて、原子カムラを越える方法を見つけていく」ということが分かる表現にしたほうがいいのではないか。（フォーラムを開けば解決する、と取られるおそれがある）
- ・ 原子力に反対している人でも参加したくなる文章が望ましい。「原子力リスクの今後の対応」と書くと、原子力を続けることを前提に議論すると取られるおそれがある。  
→単に「原子力の今後」とする。
- ・ 原子カムラを「越える」と「解消する」はどちらがいいか。  
→「解消する」は、やり様がないと感じてしまう可能性がある。「越える」のほうが適切ではないか。「越える」というより「入って」いきたいとも思う（市民側から）。

- ・ 専門家が、専門性の観点からだらしがない、という意味で、「原子カムラ」と揶揄されている場合もある。やるべきことをやっている専門家はむしろ尊敬される。「専門家はもっとしっかりしろ」という市民の声もあるのではないかな。
- ・ 原子力リスクを減らせるような学術的な知見がたくさんあるのに、なぜ活かされなかったのか。  
→今までは政策決定に反映されていなかった事実はあるだろう。これからは状況が変わるのではないかな。(市民も関心が非常に高い。逆に、学会も関心を持ってもらうよう努力すべき：そういう意味で、「原子カムラ」にはしっかりしてほしい)

また、参加者のメリットの再精査が行なわれた。

専門家のメリット：市民の考え方を知ることによって、誤解を生まない、言葉尻をとられない話し方を学ぶことができる／原子カムラを越えるためのヒントが得られる

#### 【市民パネルの募集、決定】

アンケートに盛り込む内容の検討がなされた。

- ・ 「原子力発電」についての設問が多いが、「原子力」はもっと広い意味を持つ。それに対する考えを聞き出すような質問はどうか。
- ・ 本調査 Q19 (20年後の日本の電力消費量はどうなっているか) によって、ライフスタイルを聞き出すことができるのではないかな。
- ・ 参加を希望する人は、そもそも関心が高い人だろう。Q5 (原子力の関心) は意味がないのではないかな。
- ・ 参加者選択に利用する設問は、Q6 (原発の利用／廃止) が妥当ではないかな。
- ・ 重要な設問は表面に集めるべきではないかな。(裏面を書き忘れられた場合でも場合分けができる)
- ・ 理系と文系の違いは大きいかもしれないが、そもそも全人口に対する理系の割合は低い。さらに、学歴よりも、業種のほうが違いが大きくなると思われる。Q3 (学歴) よりも Q4 (職業) のほうが優先度が高いのではないかな。

最終的に、以下の案を社会調査グループに提案することになった。

**Q3 (学歴)、Q5 (原子力の関心) は削除し、Q6 (原発の利用／廃止) を表面に移動する。空いた2問分のスペースに、代替設問を入れる。**

#### ◆代替設問案

- ・ 震災直後の省エネ生活を続けるとして、どのくらい続けられますか？ (ずっとやってもよい⇔今はやっていない)
- ・ 原子力発電を減らしたとき、電気代がどのくらい上がってよいですか？ (1ヶ月世帯あたり、0円、3000円UPまで、5000円UPまで、10000円UP以上) (%では実感がわ

きにくいので絶対値にする)

性別(2段階)×年齢(2段階)×Q6(3段階:利用していくべき、どちらとも、やめるべき)で分け、同条件の中から1人を選ぶためにその他の設問を利用する、という方法が、参加者選択の基本方法となった。

#### 【フォーラムの内容、段取りの決定】

まず、フォーラムの日取りについて議論がなされた。

- ・ 社会人のことを考えると、開催は土日。土曜日のほうが、参加しやすいだろう。(翌日が休日)
- ・ 時間帯は、午前よりは午後のほうがいいのではないか。
- ・ フォーラムは、少なくとも3時間は必要ではないか。初回はもっと時間がかかることが予想される。
- ・ 最初に示した時間は守るべきだ。ゆとりを持って時間設定をするべきだ。
- ・ 初回(最終回)に懇親会を企画してはどうか。

土曜日の13:00~16:30(休憩時間含む。議論の時間を確実に3時間確保)となった。

初回は13:00~17:00にすることになった。

次に、各回の目標設定に関する議論が行なわれた。

- ・ 各回の目標は現時点では決めなくてもいいのではないか。1回目の状況次第で、2回目以降の変更が必要になるかもしれない。→現時点(案内状に書くレベル)ではタイトルを決めておけばいいかもしれない。
- ・ 社会的リアリティを共有するのは、いつ行なうか。方法として、「協働作業」はどうか。→1回目の後半か、2回目か。
- ・ 「省エネができるかどうか」というテーマでグループ討議をする。自分が思っていることと反対の立場に立って、ディベートをしてみてもどうか。→そして、そのディベートを見ていてどう思ったか議論する。
- ・ いきなり原子力の話から入ると、参加者が身構えないか。
- ・ 1回目はオリエンテーションとする。自分の生活紹介、何を大事にしているのか、こだわりなどを話してはどうか。
- ・ 「原子カムラ」という言葉がよく使われているが、その言葉についてどういう印象を持っていますか。というテーマはどうか。
- ・ 2回目以降につなげるためにも、1回目の後半は原子力について話し合うべきではないか。
- ・ グループ作業をすると、誰がどのような発言をしているのかは、全員が1対1で把握できないのではないか。

→市民の意見としてこういうものがある、ムラびとの意見としてこういうものがある、  
ということがつかめればいいのではないか。

- 初めからグループ作業をするべきか。それとも最初は1人1人が意見を言うべきか。  
→全員の前で話すことに抵抗がある人もいる。その面では、グループ作業のほうが意見を引き出しやすい。
- グループ作業で、自分の意見が表に出てこないことを不満に思う人がいるかもしれない。  
→初めに自分の意見を書き出す過程を入れることが大切だろう。  
→自分の意見がグループに反映されないことを知るのは、まさに「社会的リアリティ」の共有の過程だ。
- グループ作業のときには、グループの中の誰かがファシリテーターをする。しかし、それをさらに見守るファシリテーター（運営側）も必要だろう。
- 毎回何らかの体験をすることが大事ではないか。全員がファシリテーションを経験するべきだ。人の言っていることを理解する、伝えるということが難しいことを理解することが大切だ。

第1回前半はオリエンテーション、後半は「原子カムラについてどう思っているか」について意見の共有（ブレインストーミング、協働作業＝ファシリテーションの練習）。第5回はまとめ。第2～4回は原子力に関連するテーマについて、意見を共有する。という大まかな枠組みが設定された。第2～4回のテーマの案として、「原子カムラにある課題」「省エネ」「安全神話」が挙げられた。

## 2. 「原子カムラ」について（配布資料 F2-6）

竹中氏から、資料 F2-6 に基づき、各方面で「原子カムラ（村）」という言葉がどのように使われているか紹介があった。質疑内容を以下に示す。

- 新聞の調査は、「原子カムラ（村）」という単語が使われている記事を全て読んだということか。→その通り。
- 1-a は、利権とあるが、仕事に関わっている以上、金の移動があるのは当然ではないか。そのような関係性があるということを整理しているに過ぎないのではないか。  
→主張が論理的に正しくない（正当な金の移動に文句をつけている）場合もあるかもしれないが、「こんなにも多くのお金が出ている」という論調で書いているということ。
- インターネットの場合、ムラの定義がそれぞれのページで違うと思うので、それを整理してみてもどうか。（例：「天下り」を批判する人は、人と金の流れがよくないと思っている。）

- ・ どのような方法で調査したのか、どのような基準で分類をしたのか、明示してほしい。
- ・ このまとめは、フォーラム参加者に示すのか。  
→運営側から一定のイメージを与えないほうがいいのではないか。フォーラムでは、参加者それぞれがどう思っているかを話し合ってもらいたい。
- ・ 新聞は2社だけで十分なのか。→地方紙(特に立地地域)を入れてもいいかもしれない。

### 3. その他

木村氏より、今後のスケジュールの確認があった。

第4回は12月21日(金)に開催される。社会調査票の確定のための議論を行なう予定である。

第5回、第6回ではフォーラムの内容を具体的に検討する。

第7回、第8回は2月に開催する予定で、マニュアル作成などを議論する。

以上